

4-8

QOLの向上
個別ケアを考える

泣いて！笑って！笑顔でピース！！

若年性認知症利用者のQOL向上を目指して

東京都板橋区立特別養護老人ホーム みどりの苑

発表者：ケアワーカー 亀井 希	共同研究者：ケアワーカー 三浦 英子、赤坂 洋
所在地：東京都板橋区前野町5-9-3	共同研究者：ケアワーカー 生活サポート室職員一同
TEL：03-5994-5925	E-mail：iwatayos@midorinosono.com
FAX：03-5994-5977	URL： http://www.midorinosono.com

今回の発表の施設 またはサービスの 概要	平成2年、初めての板橋区立特別養護老人ホームとして開設。公設民営型の施設で開設当初より社会福祉法人至誠学舎が受託運営。平成18年、公募により引き続き当法人が指定管理者として運営を継続。入所定員80床（ショート6床含む）
----------------------------	---

〈取り組んだ課題〉 【利用者】 K・Kさん 女性（要介護5） 【生年月日】 昭和27年6月13日生 57歳 【入所日】 平成17年5月24日（入所時52歳） 【主病名・障害】 クモ膜下出血後遺症（右半身麻痺・全失語症）、血管性認知症、神経因性膀胱、高血圧 入所当初より、認知症や後遺症による障害、神経質すぎるほどの几帳面な性格により、自分の思いの通らない、細かいことが気になりだすと、大声・奇声、自傷他害などの危険行為、職員への暴力行為などが見られ、職員は対応に苦慮していた。また、K氏も周囲と上手くコミュニケーションが図れないことでストレスを抱えていた。 〈具体的な取り組み〉 ① 生活状況全般を把握し、その対応を検討する為のデータとして、細かな内容をケース記録に残した。 ② ケース記録を通じて、K氏の思いや行動パターン、試行錯誤した職員の対応に対するK氏の反応や変化などを職員全員で共有し、検討した。 ③ 医務やリハビリとも連携し、内服薬や居室環境・身体機能向上などの対応方法を検討した。 ④ 外部機関から専門的な意見を聞くため、精神科受診・入院を進めた。	〈活動の成果と評価〉 K氏の現在の生活を見ると、以前に比べ ① K氏の仕草や大声から、職員が氏の思いや意思をくみ取れるようになった。 ② 生活（介助）の時間や場所を、K氏自身も受け入れてくれるようになった。 ③ 身体機能が向上し、歌などを通じて言葉や文字を書くこともできるようになった。 ④ 精神科に入院したことで、専門医のアドバイスや評価の結果が、暗中模索で介護をしてきた職員の「自信」に繋がり、K氏へのケアについて前向きに取り組めるようになった。 〈今後の課題〉 ◆ K氏が意欲的に取り組めることや出来ることの幅を広げていく。 ◆ K氏の今後の人生がこのまま続き、終の棲家になったとしても、少しでも潤いのある生活が出来るように援助していく。 ◆ K氏と職員との良い関係は築けてきているが、職員を見分け、職員のお願いを聞いてくれない事もある。 ◆ K氏の訴えが頻回な時は、集団生活での対応の難しさを感じる。 ◆ 今後、入所が増えると予測される若年性認知症のケアに役立てて行く。
---	---

【メモ欄】